

詩人であり、小樽文学館設立期成会のメンバーでもあった木ノ内洋二（一九四〇—二〇〇五）は、小樽市花園町に生まれました。花園小学校、菁園中学校、緑陵高校商業科を卒業し、一九五八年に明治大学文学部に進学。六二年に退学し、小樽に戻ると陣内露山写真館に勤務しました。文学館設立期成会を経て文学館研究員として一九七八年から二〇〇二年まで勤務しましたが病を得て退職。二〇〇五年に死去しました。

稲垣足穂や澁澤龍彦に師事し、詩画集などをのこした詩人としての側面、一原有徳や萩原貢らと交友し、話好きで酒の席に現れては語り明かした側面、膨大な知識と広い交友関係から北方舞踏派やジャズ愛好家たちの相談役となった側面、そして文学館設立準備時期から調査研究・展示の基礎作りをした側面など、小樽の地に根を張り、小樽の文化を支えた一人の詩人の足跡を没後二〇年の節目にたどりまします。

あわせて、若者を中心とした前衛的な舞踏や美術が活発に行われた一九八〇年前後の小樽のカルチャーシーンについて、助言者、評論者として積極的に関わった木ノ内氏の言葉を通して考察します。



木ノ内洋二 1980年頃

『詩人・木ノ内洋二』(二〇〇九)に寄せられた追悼文より

笑い顔しか思い出せない。

木ノ内さんの事を思うと、うかぶのは笑い顔だけだ。

怒った顔も悲しんだ顔も全然思いうかばない。

「ねえねえ、これ、おもしろいんだ」

「これ、おもしろいでしょ」

「ダフダフ……」

木ノ内さんと会っているときはいつも、「おもしろかった」し、「楽しかった」からだと思う。

一九七六年ころ、いつの間にか木ノ内さんは私のそばにいた。

(渡邊真一郎)

もう一つ、洋二さんを通して、澁澤龍彦からの伝言である。ちょうど「ワイオレット」の出版で上京されたとき、多作の必要性を解かれ、毎年一冊くらい出すようにと洋二さんにいわれ、あわせて「一原にも伝えてほしい」とのことであった。後年実作上に自信を持たせてくれた力強い忠告であった。

(一原有徳)

木ノ内さんは実によく笑う人だった。笑うことならいつでも付き合います、という邪気のない人だった。いつも屈託なげであった。いや、なかった筈はあるまい。それを見せなかっただけ、ではなかったか。

(萩原貢)

稲垣(足穂)先生宛 私の手紙
 「少年愛の形而上学」を繰返し読んで、先生がお書きになっただけの言葉、空で覚えている木ノ内さんとお話するのはなかなか楽しい。テンポが早く元気な木ノ内さんには感心させられます。
 黒いセーター、黒いパンツで「サヨナラ」と言うと、アツという間に、夕方の人混みに紛れてしまう木ノ内さんは、ちよつとせわしないカリガリ博士の小道具係と言った風です」

(萩原幸子)

「フツダのことは」には、美しい比喩もありました。

「水の中の魚が網を破るように、また火がすでに焼いたところに戻って来ないように、諸々の煩悩の結び目を破り去って、屎の角のようにただ独り歩め」

(吉田美和子)

展示構成

■詩人とフルース

七六年ファン集まり「フルースこれっさり」の経緯

■詩人と津軽

吉川圭生LP「王生」自主制作の経緯(「王生」LPライナーノーツ他)

■詩人と六〇年代アヴァンギャルドアート

六〇年代活版屋からの来集と送られた美術書籍のストーリー「パンフレット等」

■詩人と小樽文学館

新聞連載「私と小樽文学館」より

■詩人の言葉

長編詩「ワイオレット」より、一原有徳との合作詩「ワイオレット・ブース」より、文学館美術講座

■詩人と一九八〇年前後小樽のアートシーン

運河保存運動と音楽・舞踏・美術・映画年表(小樽で発行されたタウン誌・コンサート・映画チケット等)

同時開催 小樽文学館と模型クリエイター 展示をつくる仕事の舞台裏
 ミュージアムに必須の展示模型。小樽文学館では技術を持った職員や協力者が制作を行ってきました。開館47年目に、これまでに制作・活用された模型のコレクションを制作過程とともに展示します。

5月17日(土) 14時~14時40分 学芸員・制作者による展示解説
 6月8日(土) 14時~15時30分 随時研究室 講演「わたしの模型の作りかた」 田中まり



記述ある小樽の歴史模型制作



公式X (旧Twitter)



文学館ホームページ



公式ホームページ